

災害時のデマを減らすためには

兵庫県立大学 環境人間学部・大学院環境人間学研究科 教授

木村玲欧

○能登半島地震でもデマが発生した

「地震で家族が下敷きになっている（実際の住所が明記）」、「地震で車に閉じ込められて、身動きがとれない（実際の住所が明記）」、「地震が人工的に起こされた」、「能登半島に外国系の盗賊団が集結中」、「避難所を出ると仮設住宅に入れなくなる」。これらはすべて能登半島地震で発生した根拠不明な情報—デマ—である¹⁾²⁾。

消防・防災の関係者ならばこのような投稿をX（旧ツイッター）で見かけても、これだけで信じることはないはずである。その情報自体の科学的妥当性や論理性を検討し（内在的チェック）、マスメディアの報道や自治体のサイトなどで情報のウラを取ってから（外在的チェック）、必要に応じて何らかの対応に移るはずである³⁾。

しかし一般市民は、そうはいかない。能登半島地震で、Xに具体的な住所とともに「息子が挟まって動けない。私の力では動かない。頼みの綱がXしかない。助けて」という投稿があった。この住所に住んでいた石川県の40代の女性に、知人や警察から多くの問い合わせがあった。しかし女性の自宅は、物が散乱する程度の被害で、そもそも息子がいなかった。身に覚えのない投稿をされた女性は、「災害時に警察の業務を妨害して許せない」と憤っている⁴⁾。

○災害時にデマが発生する3つの理由

災害時にデマが発生するのはなぜだろうか³⁾⁵⁾。デマの発生理由の1つめは、災害発生後のあいまいな状況を理解して、不安な感情を解消したい、そして周囲にも情報を伝えたいという「人間の欲求」から発生するデマである。これは、悪意を持って意図的に作り出されたデマではない。このようなデマは「流言」（りゅうげん）や「誤情報」とも呼ばれて、いわゆる悪意を持って意図的に作り出される狭義の「デマ」と区別することもある。

2つめは、愉快犯だったり、他者を攻撃したりする目的からねつ造されるデマである。いわゆる「デマ」の語源であるデマゴギズム（扇動政治）に近い。災害という混乱に乗じて、悪意をもって意図的に作り出されるのである。「デマ」以外にも「偽情報」と呼ばれることもある。

2016年熊本地震の発生直後に、「地震で動物園のライオンが逃げた」と嘘の内容がツイッターに投稿された。動物園の業務を妨害したとして神奈川県に住む20歳の男性が逮捕されたが、警察の調べに「悪ふざけでやってしまった」と述べている。

3つめは、SNSなどでの表示数・再生数によって得られる広告収入・収益を目的に、ねつ造されるデマである。2023年にXの仕様が変更されて、投稿の表示回数（インプレッション）によって収

益が得られるようになった。そのため、表示回数を稼ぐために虚偽の投稿をするなど、今後、収益を目的としたデマは増えると予想される。

○ SNS がデマの拡散を加速させる

SNS の発達によって、誰もが様々な情報を不特定多数に広く発信できる。これにより、被災場所と被害状況を早期に特定して、効果的な救助・救援に結びつけることができるようになった。一方で、根拠のないデマも発信され、さらにそれを善意の第三者が拡散することで、消防や警察、地元自治体に問い合わせが殺到し、活動の大きな妨げになっている。

特に災害時のデマは、具体的な表現で人間の感情に訴えかけたり、興味・関心を惹くような内容であったりと、善意の第三者が「この内容を広めたい」と思えるような仕掛けで巧妙に作られている。そして「よかれ」と思って拡散した情報が、かえって支援の妨げになったり、差別に加担して人を傷つけたりしている。このような「よかれ拡散」を今後の災害で減らすことは、大きな課題である。

2011年 東日本大震災では、「痛い、皮膚が破れているかもしれない。失血がひどい。外から声が聞こえなくなってきた、もう騒ぎは沈静化しているのだろう。痛みで何度も身を振（もじ）り、しかし逃れることができず、口からは苦痛の発話が漏れる。言葉にはならない。痛い。その気になれば、痛みなんて完全に消しちゃえるんじゃないのか」というデマがツイッターで流れた。SNS が発達するまでは、デマは口伝による伝言ゲームのようなかたちで拡散していったが、SNS が発達すると、このような感情に訴えかける具体的な長文が、そのまま拡散されて人心を惑わすようになった。³⁾

○ 流言は智者に止まる

中国戦国時代の思想家である荀子は、その著書のなかで「語に曰く、流丸（りゅうがん）は甌臯（おうゆう）に止まり、流言は知者に止まる」と書いている（巻第十九大略篇第二十七）。つまり「古くから言われていることに、転がる玉は窪地に入れば止まり、流言は知者に至れば止まる」という意味である。荀子が生きたのは今から2,300年ほど前のことである。私たちの想像を超えるような古においても、現代と同じような課題を抱えていることに心を引きつけられる⁶⁾⁻⁷⁾。

ちなみに、秦の始皇帝が中国を統一していく過程を描いた漫画『キングダム』は、この頃の出来事を描いたものである。荀子のもとで学んだ李斯（りし）は、秦の宰相となって秦王政（後の始皇帝）を支えることになる。また同門の韓非（かんぴ）（韓非子の著者）を秦に招いたが、韓非は秦で自死することになる。もちろん漫画として脚色されているが、この顛末については『キングダム』第70巻に描かれているので、キングダムを読んでいる方は「あのときの言葉が、今のデマをまつわる状況でも使われているのか」と記憶に留めてもらえればと思う⁸⁾。

荀子の文章には続きがある。「是非疑わしければ、則ち之を度（はか）るに遠事（えんじ）を以てし、之を驗するに近物（きんぶつ）を以てし、之を參するに平心を以てすれば、流言は焉（ここ）に止まり、悪言（あくげん）も焉に死す。」つまり、「正しいか正しくないかが疑わしければ、遠い聖賢や先王の事績と比較して考え、身近な事例と比較して検証し、公平な心をもって考察すればよい。このようにする知者の前ではついに流言も止まり、邪説も死に絶えるであろう。」という意味である⁶⁾⁻⁷⁾。過去の事例や教訓をもとにして比較検討することの重要性は、現代のデマへの対策にもつながる知恵である。

○時間経過とともに変わるデマ

過去の事例を概観すると、災害時のデマは時間経過によって減少するが、同時にデマの内容が変化していくことがわかってきた⁹⁾。

災害発生直後は、「災害の発生原因」や「災害の再来」などのデマが多く流れる。例えば、1995年阪神・淡路大震災では、「地震は〇〇（新興宗教名）の地震兵器の仕業だった」という非科学的な発生原因がデマとして流れた。また、2016年熊本地震では、「夜中の1時頃ごろ、佐賀に震度7の地震が来るかもしれないという予報が出ていて、いつでも逃げられるように準備して」とのデマが流れた。

救助・救援期は、「人的・物的被害」「二次被害」や「著名人の対応」などのデマが多くなる。1982年長崎水害では、「堤防切れと満潮でダムが決壊した」というデマが流れた。もちろん1923年関東大震災において、「朝鮮人が井戸に毒を投じている、集団で地震の混乱に乗じて来襲する」といったデマにおける虐殺事件は、私たちの教訓として忘れてはならない。

またこの時期は、著名人（政治家や芸能人など）の対応についてもデマになりやすく、1991年雲仙普賢岳噴火では、「〇〇市（具体的市名）の災害対策本部が市外に逃げ出した」とか、2011年東日本大震災では、「〇〇党の〇〇（具体的人物名）が東北大震災を『ラッキー』と表現した」などのデマも流れる。

復旧・復興期は、「被災生活」のデマが多くなる。1995年阪神・淡路大震災では、「避難所を出たら仮設住宅への入居資格がなくなる」というデマが流れたが、今回の能登半島地震でも、「二次避難をすると仮設住宅の抽選から漏れる」というデマが流れた。また、被災地外の人々を対象にした募金・義援金のデマも懸念される。著名人や慈善団体を騙って、具体的な URL や QR コードによって寄付を募る「詐欺メール」のようなデマに

も注意が必要である。

○デマへのリテラシーを向上させる

どうやって災害時のデマに立ち向かうべきなのか。まずは、過去の災害時のデマを知った上で、事前ルールを作ることが重要であると考えられる。

何か情報を目にした場合には、「本当か?」、「自分が広めるべき情報か?」と考えることである。このような「ファクトチェック」においては、2種類のチェックが必要である。

1つめは、受け取った情報について、内容が矛盾していたり日本語表記がおかしかったりするかという、内容そのものをチェックする「内在的チェック」である。

2つめは、信頼できる発信元か、特に発信元が普段はどんな情報を発信しているのか、もしくは国や自治体、マスコミなどの公式情報でも同様の内容について発表・報道がされているかという、内容のウラをとる「外在的チェック」である³⁾。

このように「情報を疑う」と「情報を確かめる」という情報リテラシーが必要である。そして、「根拠がわからないものの拡散には自分は加担しない」という判断をすることも重要である。

「令和4年度 国内外における偽・誤情報に関する意識調査」（みずほリサーチ&テクノロジーズ）によると、ファクトチェックという用語について、「内容や意味を具体的に知っている」が9.1%、「なんとなく内容や意味を知っている」が14.6%、「言葉は聞いたことがある」が20.1%、そして「知らない」が56.3%であった¹⁰⁾。ファクトチェックは、まだまだ国民には浸透しておらず、「デマ情報に対するリテラシー向上」は、消防・防災の専門家が積極的に取り組むべき課題である。

【参考文献】

- 1) NHK NEWS WESNS (2024) 「“人工地震が原因”
など不安あおる偽情報投稿 拡散」, 2024年1月2
日 19:27, [https://www3.nhk.or.jp/news/html/
20240102/k10014307161000.html](https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240102/k10014307161000.html) (2024年3月27日
確認)
- 2) NHK NEWS WESNS (2024) 「地震後「外国系窃盗
団が能登半島に集結」 偽情報など SNS で拡散」,
2024年1月10日19:02, [https://www3.nhk.or.jp/news/
html/20240110/k10014316541000.html](https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240110/k10014316541000.html) (2024年3月
27日確認)
- 3) 荻上チキ (2011) 「検証 東日本大震災の流言・
デマ」, 光文社新書
- 4) 共同通信 (2024) 「「息子挟まれた」虚偽投稿
SNS、不安募らせる女性」, 2024年1月2日22:17,
[https://news.yahoo.co.jp/articles/f4774f9457b20525
7741fe69ed992b3dcba6b630](https://news.yahoo.co.jp/articles/f4774f9457b205257741fe69ed992b3dcba6b630) (2024年3月27日確認)
- 5) 廣井修 (2001) 「流言とデマの社会学」, 文春新書
- 6) 塚本哲三(編) (1922) 「荀子：全」, 有朋堂書店
- 7) 河南殷人 (2016) 「新読荀子 (web サイト)」, [http:
//sorai.s502.xrea.com/website/xunzi/](http://sorai.s502.xrea.com/website/xunzi/)(2024年3月27
日確認)
- 8) 原泰久 (2023) 「キングダム 第70巻」, 集英社
- 9) Kimura, R. and Iwao, A (2020) “Study on Features
of Rumors Generated at the Time of Disaster:
Characterization of Actual Rumors”, 17th World
Conference on Earthquake Engineering Conference
Proceedings, No.7f-0001, 12pp.
- 10) みずほリサーチ&テクノロジーズ (2023) 「令和
4年度 国内外における偽・誤情報に関する意識
調査－報告書－ (概要)」, [https://www.soumu.go.
jp/main_content/000889637.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000889637.pdf) (2024年3月27日確
認)